立好 持一 負二　宗因 勝一 持二
俊世 持一 負二　親秋 勝一 持二
永純 勝二 負一　吉仍 勝一 負二

右以飛鳥井代弘賢所蔵古写本挍合畢

後陽成院御歌合 文禄三年八月

題

虫 月 恋

一番

左 勝 御製

初霜のうつろひみえてたゝ虫の声をさへまてよ絶しとやせる

右 内大臣

程なき思ひにたえし絶も又かよはゝくるし旅人のむしの音

右申云聞虫声以初霜忽字旅幽心詞珍重く

虫満座申云左申云歌と云はたゝあるかたき心をのこすや

判云左歌ハねやの虫の音をかなしからんと思ひやれる心不可思議に詞ともなかなか姿やさしかるへし
右歌左方申状尤當せり歌さまもさのみのことにこそ
不及沙汰以左為勝

二番

左　　雅敦卿

身によはる野への萩をもむしの音ぞ尾花か袖をまねくのみかは

右 勝　　重保卿

声なからかなしき旅人はむしの音も袂よりおつる心地のみして

左申云歌二首四の末句を耳にたつ尾花か袖とまねくむ

如何右申云心地のみしてといへるいひあまされたるにや

判云左歌尾花か袖のことは身にあまりたる歌と見ゆるを
まねかれ侍るへし右歌結句なと云とめかたきさら勝る
頗勝るへくや

三番

左 持　　公宣卿

すまてつるも道のもとに出てむしの音をきく旅人の夕暮

右　　経元卿

かしこへてとはぬかけの蓬生にさてもよなよな松むしの声

右申云道のゆくてにと云むしの音やいかにと

ちかひもありけりとよめる　左申云頗無念　判云左右とも
みしそ可もあまりてるやうにみゆるさしたる難はみえねと
但いさゝかも無念の事侍りしかは持にや

四番

左　持　　永相卿

歌をさへいとくらしむる名にかけてきくもきえんまつむしの声

右　　兼嵗卿

ある聖の道つくしもやなく歌もむしの形く声もやさしくなるらん

左申云此心めつらしからさるものなりと　左申云末二句
連歌詞のさまなり　判云左右申状とも不当せぬか

なすよし持とん

五番

左　持　　基孝卿

聞をとり小鷹かりゆく入駒あ人ニ乗御るにまつふくつかれける

右　　公経卿

むしの声のたゆるや夜の秋のとしてきつものそつさのこすえ すゑ

右申云多能をたて事もしける何の哀ともなし
左申云哀傷心不相応歌様も不宜　判云歌様左
右歌もかくしそ又為持

六番

左　　　　　　　　重通卿

夕まくれ秋さへきはまる道なれやむしの音ふかき野辺の人めさ

右　持　　　　　　親経卿

ゆふ霧をあはれやたれにふかくむしの音ももの哀さの浅茅生の

左申云霧ふかくさえてきはまる心の右申云葉の露も霧ま

むしの音も末葉に霧まよへる心宜歟判云左歌浅茅生の

みなもとてる風いひなすも左歌霧をも虫の心おもしろく

見えはへるさま侍めれ此夕霧にむしをあはれもたえてひつ

持とや申へし

七番

左　勝　　　　　　光宣卿

うらかれはまくはの下葉ころもくさも秋のうらみはかりよとやつて

右　　　　　　　　輝資卿

霧のうちに霜をとふかしむしの聲秋をへさてや根をやるらく

左申云霜をみる心地し侍るを右申云霜をとふてきと

秋をへさてやめ申判云左の歌のすきのてたけ難ひて

なりぬる

負し右の歌え勝不侍もまつし

八番

左　持　　　　　　兼勝卿

ちるの夜のかへりまくにそふく露もみのさうしみゆむしのねく

右　　　　　　　為仲卿

やまさとのふかくさはしけみ海士かるも色にほとむ虫の秋はしるらん

右申云。露下にほとへる事なし。左申云。色にほとむ虫秋をまつ人こそ例おほかりつれなし。左陳云。しもにすむ虫も秋はしるらんとよめる歌ども作者あまたの虫人たよりとよめる數あるへし。判云。左歌。露下にほひへる事ハあまたの人へし。右はこゑにすむ虫をきくことなく秋はよみなせるよりは、左まさるとやいふへし。如何

九番

左　持　　　　　為雅僧正

風のおともたえつかなるよその虫の音かはるとまつ宿の神秋の空

右　　　　　　　為満朝臣

寄引猪はさつの野の山のしほそ神まさのちらぬ虫たえたる心

右申云。山の音秋夜をまつ心月の光もらす。左陳云。神秋なきとは盡ハあまたの人也。仍神秋のこころとも云へし。右又申云。此こころおほつかなし。又時節不叶歟。左申云。下句いつはり。判云。左ハ句。左方申。如此說左も字さ左方申ておほせとも持とやいふへからん

十番

左　　　　　　　時通朝臣

さしのぼる月さへ山路の柴はなをさしもしらぬもの影

右　勝　　　　永孝朝臣

露も袖にこぼれてしほやさしぬる野人の思を知らうせて聞らの夕暮

右申云一首の趣向月花なとの心ばえにて左陳云松

出羽人などとりなすに右申云構の心をさらなくいつく

左申云露は袖をこぼるゝふたつろやうもなし判云

を心詞かけかくしておもはへる所なし右勝侍る歟

十一番　月

左　勝　　　御製

雲はらふ風にあらしの秋ぞも我すむ宿の秋のよは月

右　　　　為家卿

ありあけの深き水無瀬の秋はたゞ月すみのぼる嵐は新なり

右申云雲上乃晩月は旧時をしのびいでぬる故とぞ

あ叶也宜敷左申云右歌仙洞の旧事不加雑

判云左は文武の徳を撰ぶへしも程堯舜の化を

あらそふ見別聖主はあらひなすへし歌にはとさて

六儀相叶也歌は既にしと申侍るも奈なかむ大文

水無瀬の月鮮の洞あれ也のしも今の月をわけよかたん

事識れ宜也とも申しつる人し作者も君の徳を

のへ侍る辞段情詞もまた侍るしかれも皆は居よ

優して持と定申侍らんいかゝ

十二番

左 持　　　　　雅教卿

更ゆく人の影をも袖にやとしてきむらくの秋たえぬ夜の月

右　　　　　　為満朝臣

契ゝ栞ある今宵の月をとふる人まても昔にかへるやのゆかしさ

右申云無指難　左申云定ありけるにやおもへるにや　判云左

歌のとをしをはんせ若者様せられへし　右又故侍る難

かし　但不加勝負字

十三番

左 持　　　　　公董卿

待出し心よかくるやまの端や月みるへきものうき世なりけん

右　　　　　　重保卿

更ゆく人乃秋ハ何そと毎みるせらし池の月は影ハやとし

右申云待出し心よかくる山の端やまたにくらきか　左申云

可相思所　判云左心をとゞむることにおもひよりひとへ

し又うき世なれんなと述懐もいかゝ　右又ねたましき

但是ハ勝負定めかたくこそ

十四番

左 持　　　　　永相卿

されはいかに法階ハ始の色よりも月も名高きことそのよは秋

右　親經卿

三笠山下葉かくれて露を宿す月恵の露に色まぬ代とそ

右中云左月の名高きハ句論花何乃用まの左中云

三笠山の月雑なし判云左三階の月とよめる

左三笠山乃神威をかるとも可准て持とん

十五番

左　基孝卿

月影も身にしむ床よおきゐつゝ神代もまかすに雫も長き夜

右 勝　經之卿

海も鏡神代をかけて照らん地高きまの原を出る月影

右中云おもしろき所なし左中云左をしゝきさかり

判云左聊もおもしろき所なし右左をしゝきやう

左のゝ神代のさま勝とへらん

十六番

左 持　重通卿

あめの浮橋かくまでも承けす中に月も明石のうら浮き道

右　内大臣

志ら浪をハいくよ里までさえぬらん長きかさりは秋のよは月

右中云船中此何ことはの右中云無難事　判云左

慕樹本古風右思千里月新しにあかぬ猶まや

十七番

左　勝　　光宣卿

君か代のくもらぬ空に見えし月なき世ハ光もみかく玉しきの庭

右　　為仲卿

天地とゝもの末まて月やさやけからめ重てすめるを月の光とそ見し

左申云無申旨左方無指難判云左歌祝の心甚しく尤右負侍らん

十八番

左　勝　　兼勝卿

松風も身にしみまさる秋の尾上に月を吹はらふ見

右　　永孝朝臣

寄むすふ野の末の雲秋風にみたるゝ月も吹はらふ起

左申云無指難右申云みたるゝ月のかけさへ何

判云左歌は聞なる様なれとも空の句識にさ[illegible]

中のさやなまけるさ[illegible]勝と申へし

十九番

左　　為雅僧正

秋といへは心清しの見えし影とまつ月も月をまつよ

右　勝　　輝資卿

身をてらしぬ影そなすもの通ひ秋の月桂をおりしあともたへてく
右中云宜歟左中云迷惑也但心よろしき歟判云左
方大方宜とてさも侍りなむ但左方家葉聲ゝ後
折桂芳跡をへてつかへし身をてらさぬ心聞えく
つかうまつり勝とそ申侍き

卅番
左　勝　時通朝臣
萩の葉にすゝきやなすゝ秋風に露こほれそふ月をみるかな
右　兼経卿
色深きしくれもかさね西の海や月の入さのやまのはたとある

右中云無巨難左中云心あらはつのみなし判云右西
湖の月さやかにたてまつる侍れとも左はいとさやかにあり
きむたちす

卅一番　恋
左　勝　御製
わかのなき身をたのむ萩を吹風のそよにはよれとも露そこほるゝ
右　親経卿
しるへなき人の待ぬ世しあれのそらの山のあきのおくとはいはれし
右中云源氏物語歟頻猶宜左中云左方殊
宜判云左方姿詞妖艶にして見るところ侍る右の

右もあしからすつゝまれまつに侍りしと左歌
まさるへし

卅二番

左　　　　　　　　　　　　　　　雅敬卿

今ハ又袖の涙も冬まちかねて此時雨をとさそひえぬて

右　勝　　　　　　　　　　　　　為仲卿

志くれつる紅葉する紅葉の名残清かくるも多しみえけん

右ハ云其指事無左ハ云宜矣判云無此時雨乃

下深よりも紅葉の寄ときはくてけ侍りき

卅三番

左　　　　　　　　　　　　　　　公遠ゝ

秋といふ中に時雨の名もつらし松まつまで紅葉となるらひ為ハ

右　勝　　　　　　　　　　　　　兼成ゝ

たのましとおもひぬる秋の侍もつまたなきこ夜のよまきて

右ハ云難思て也右みたりも左ハ云無殊事判云

左歌ハみる深ハ勿論右歌は中もたとなするすな

めくへしたとこうゆさし勝侍らん

卅四番

左　　　　　　　　　　　　　　　永相卿

我恋ハ秋の林乃色よりも紅葉に出しなにハそつらも

右 勝　　重保卿

待遠さもうきもみのしは数のそてなすふとえふは思ひ（とあらん）

右申云条ゝ見ゆる色に出しとハいつく左申云無難

判云左歌ハとおもふに右の条ゝわかめ侍しきハ

待遠しと左の方ハ申さく四句ゆへにやまさる

又右の為勝

廿五番

左 持　　基孝卿

ぬるみつそてゆく末まよふ恋の床の数ハとおもふ人の思ひへらむ

右　　永孝朝臣

なふかく人よつるきそのそてあり袖ハ涙の色そまさりける

右申云頗旧事歟左申云条のわさらするゆゑ判云

左右ゝ状おほえせすまさぬ持なるへし

廿六番

左 持　　重通卿

あはれさのなかるゝ人もかゝる哀やしるらむ袖を人はみるらむ

右　　経光卿

身はかくて我おもひきたる袖のうへにつゆおきまさる夕暮の空

右申云無し左申云無難判云左歌無難なれとも

いと面白くつゆに詠まさる歌難ハなかるさる

歟し右又難なく負也ハ能持と申へし

廿七番

左　勝　光宣

むらさめの袖の涙と秋ふけて身にそしむ夜の床そかなしき

右　内大臣

まくらにふ月し尾上のおもひまもなき清見の秋風そ吹く

右申云耳心左申云無難判云左方右方人耳に

右又無難なし左の詞ハ殊なる所の侍るへし

左下句なをさし侍也又右方人申趣まうすのせ

左為勝

廿八番

左　兼勝卿

海士のすむみるめもあらぬ我袖の中人にあさたれぬかくる袖の浦波

右　勝　為満朝臣

わすれてもかひなき人をしのふ身をしるもしらぬも袖ぬらすや

右申云有病左申云古歌也判云右方古歌

なをうき病有よはまさりぬるへし

廿九番

左　持　為雅僧正

天地とともにつゝしまれる道いのるに神もをさむる

右　　　　　雅経卿

かさなりの人をあらしにまかせても秋の一葉にあらはれのこて

右ハ云天地開てより此秋の名ちりつゝ以俳諧

為可為證據歟左ハ云古来きこえし判云左

歌左方中猶相當歟右の歌も秋の末にてさこそ

如此ミにとゝしとハいつて左方人ハにつ但ことに持

不分ハなすの人へし

三十番

左　勝　　　　時通朝臣

秋かけて冬やある出てゝの秋の松さへト草ニ寄ハなくしと毎

右　　　　　輝資卿

袖そまつ色よハいかる大ゐ川時雨ハ晴て此大井清き瀬

左ハ云文字不審右ハ云別事判云松のもみち

草まくらの様おかし色まて浅深難知乎

讀師

講師

判者　　　内大臣　二条西

右後陽成院御歌合以百花斎宗固本校合了

群書類從巻第二百十二

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan